

あとがき

予備的研究1年、基幹研究2年と3年間の月日を費やし今ここに成果報告書としてまとめることができた。この間、多くの方々にお力添え頂いた。みなさん一様に発達障害のある子供たちの二次的な障害に課題を感じ、課題解決に向けて取り組もうとしている本研究の少しでも力になりたいとの思いから、貴重な時間とお力を惜しみなく割いて知見の提供をしてくださった。この場をお借りし、心よりお礼申し上げます。

今回、二次的な障害の予防・低減に際し、「学びへのアクセス」「自己理解」「信頼感」という3つの重要な視点を提案するに至った。これらいずれも目新しいものでなく、誰もが疑いようのない、誰もが当然と思うものばかりである。

しかしここで問いたい。

その誰もが子供に向き合う際に当然に重要なことと思うこれら3つの視点を、どの子供に対しても、いつでも有しながら対応していると胸をはって言えるであろうか。

私自身、残念ながら「はい」とは決して言えない。だからこそ、今一度、こうした概念がエビデンスをもって必要ということが明らかになったことを認識し、具体的にどうすれば良いかについて整理されたことを日々の実践の中で活かしながら、自分のものとしていきたいと今は考えている。その意味で本研究の遂行が自分自身に与えた影響は大きい。

最後になったが、この研究の初年度、ある関連機関を訪問した際に「学校教育に期待するものは？」と尋ねた時のことを思い出す。その際「学校は、日々新しいことを学び、成長、進歩、向上していくことを常に求められる。しかし、何もしないで良い時間、ぼうっとする時間も大切」と話された。子供の可能性を引き出し、次への一步を踏み出すための支援とともに、ときに、ただそっと寄り添いながら、ありのままのその子を大切に見守ることの意義も再認識した。

このような自身にとって学び多き研究をそれぞれの特性を活かしながらともに楽しく刺激し合い進めてきてくれた研究チームのメンバーにあらためて感謝の意を表したい。

この研究がきっかけとなり、子供たちが少しでも二次的な障害を味わうことのないように願ってやまない。

2021年3月

研究代表

海津 亜希子